



TITLE:

# モンゴル族の遊牧と狩獵：十一世紀-十三世紀の時代

AUTHOR(S):

吉田, 順一

---

CITATION:

吉田, 順一. モンゴル族の遊牧と狩獵：十一世紀-十三世紀の時代. 東洋史研究 1981, 40(3): 512-547

ISSUE DATE:

1981-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/153834>

RIGHT:

# モンゴル族の遊牧と狩獵

——十一世紀～十三世紀の時代——

吉 田 順 一

はじめに

## 一 狩獵の問題

1 ウラジミールツォフの考え

2 ステップの狩獵

3 モンゴル族の狩獵と他の遊牧諸族の狩獵

## 二 遊牧の問題

1 ウラジミールツォフの考え

2 モンゴル族と家畜

む す び

はじめに

モンゴル族の經濟の基本は、言うまでもなく遊牧であり、それとともに狩獵も經濟的に重要である。遊牧と狩獵のそれぞれを經濟的な面から把握し、同時にその相互関係も把握することは、彼らの經濟の基本を理解する上で、根本的なことからである。

古い時代について言えば、このような彼らの經濟の根本をどのように理解するかによって、モンゴル帝國の成立と發展

の問題の扱え方は左右されるであろう。従つてソ聯邦のウラジミールツォフも、その名著『モンゴル社會制度史』をまとめるにあたり、その冒頭にこの問題を取り上げ、具體的に分析して論じたのである。<sup>(1)</sup>以來、彼の考えは、モンゴル史研究に大きな影響を与え續けて今に至っている。

もちろん、中には彼の考えの一部を批判する研究も出された。<sup>(2)</sup>私も最近あらためてこの部分を検討してみたところ、そうした批判を更に進める餘地があるのではないかと考えるようになった。そこで以下に、この問題について分析して、私なりの考え方を提出してみたいと思う。

## 一 狩獵の問題

### 1 ウラジミールツォフの考え

ウラジミールツォフは、十二世紀のモンゴル諸族は「その生活様式と經濟の方法」に従つて「森林または狩獵諸族(hoyin irgen)のグループ」と「ステップまたは牧畜諸族(ke'er-in irgen)のグループ」の二グループに分けられるとし、<sup>(3)</sup>「森林の民は、疑いもなく部分的に、その近隣の遊牧民の影響を蒙りはじめ、その經濟機構が變わるに至った。すなわち遊牧生活の方への發展、それへの漸進的な轉換が現われた。他方……モンゴルの遊牧民は、狩獵生活の殘滓を多く殘していた。若干の場合においては、森林の狩獵民とステップの牧畜民との間に線を引くことは、かなり困難である。過渡的段階にある部族があり、あるときには牧畜生活をし、あるときには狩獵および漁撈に従事する部族または部族の分派、分岐した氏族や家族があつた」<sup>(4)</sup>と述べている。

さて、そのステップの牧畜民としてのモンゴル族について、彼はつぎのように述べている。「十一世紀—十三世紀のモンゴル遊牧民の主要な仕事は、牧畜と狩獵であつた。彼らは遊牧民であり同時に狩獵民だったが、それでもその經濟の

基礎は牧畜であつた。<sup>(5)</sup>」

ところで「十一世紀—十三世紀のモンゴル人は、遊牧經濟だけでは暮して行けなかつた。食料が不足なのであつた。その不足は、あらゆる種類の禽獸の、部分的には魚の獵によつて補われた。困難な場合には、植物の根も食べた。これは全てもう一度、チンギス・ハン帝國の成立まで、オノン、ケルレン、トラ河畔に住んでいたモンゴル人には家畜が少かつたことを證明する。だから——と、ルブルクは言っている——彼らは狩獵から自分の食料の大きな部分を得ている。<sup>(6)</sup>」

そしてウラジミルツォフは、更につぎのように述べている。「以上述べた總てのことからみて、古代のモンゴル族を單なる遊牧民ではなくて、遊牧狩獵民だと考えることができる。<sup>(7)</sup>」こうした状態は、モンゴル帝國時代にも、依然として變らなかつた。<sup>(8)</sup>

ところでその後、彼の言う中世期（十四—十七世紀）に至ると、狩獵の經濟的意義は急速に低下した。「あいかわらずモンゴル人は狩獵をし、自分の家畜群を放牧していた。しかし多分、狩獵は過去の時代のように大きな役割を演じることをやめたのであつた。今やすでにモンゴル人は遊牧狩獵民から本當の遊牧民に變化し、單に補助的な狩獵または氣晴しとしてののみ狩獵にたずさわつた。大規模な卷狩はきつと、他の多くのものと同様、傳説の領域に退いてしまつた。<sup>(9)</sup>」かれは補助的な狩獵云々のところに注を附して「われわれの資料であるサガン・セチェンおよびアルタン・トブチはしばしば狩獵について述べているが、文脈からみて、多くの場合、これは主人の氣晴しのための狩獵として行われたか、または食料の獲得が大變困難な状態で行われた<sup>(10)</sup>」と言っている。

以上からみて、十一—十三世紀時代に遊牧經濟による食料の不足を補うためにモンゴル人が行つたという狩獵は、先の「補う」という言葉から、補助的な意味をもつていたように思われたのであるが、後代のそれは、このように氣晴しの狩獵を別とすれば牧畜生産物の不足が「大變」著るしくなつた場合に行われたのだから、補助的であるにしてもむしろ臨時のに行われるにすぎないものとなつていたのだと、ウラジミルツォフは認識していたらしい。

以上のウラジミルツォフの見解を整理してコメントを加えてみる。

第一に、十一—十三世紀のモンゴル遊牧民の経済にとって狩獵は重要な意義をもっていた。よって當時のモンゴル遊牧民は、遊牧狩獵民と稱すべきであると述べている。この點については、當時のモンゴル遊牧民を遊牧狩獵民と稱することとするか否かを別にすれば、この時代、狩獵が重要な意義をもっていたことを否定する人はほとんどいない。それを否定する岩村氏の意見の誤りであることは、すでに原山氏が指摘したとおりである。<sup>(1)</sup>

第二に、當時の狩獵は、モンゴル人が遊牧経済だけでは暮して行けなかつたので、その食料不足を補う意味をもっていたと述べている。近年、ソ聯邦のマルコフも基本的にウラジミルツォフと同じ考えを述べている。<sup>(2)</sup>わが國の後藤富男氏も同様の主張を行っている。<sup>(3)</sup>

一方、モンゴルのイシジャムツ氏は、これとは異って「牧畜のつぎに入る経済的に重要な分野というのは、狩獵であつた。狩獵は主として補助的な性質の経済であるとの認識が存在している。だが十三—十四世紀時代および特にそれ以前、狩獵は経済の基本的な分野の一つであつたのである。ただ、のちの時代においてのみ、その範圍と意義は減少し、眞に補助的な性質を有するようになったのである」と記している。<sup>(4)</sup>このように狩獵の意義を補助的なもの以上と評價することは、原山氏も行い、同氏はそれを「縮小の許されぬ唯一の貴重なる財産たる家畜を保全するための『基盤』となつた」と記している。<sup>(5)</sup>狩獵の経済的意義をより高く評價しようとするこれらの立場は注目には値すると思うが、ただ次章で述べるように、原山氏の遊牧経済にたいする評價は低すぎると、私は考えている。

第三に、當時のモンゴル人の狩獵というのは、長期的にみれば、彼らのかつての狩獵生活の殘滓として存在していた。従つて時代が下るにつれて、彼らの経済において占める狩獵の地位は低下して行き、十四—十七世紀時代にそれはさほど重要な役割を演じなくなつていた。逆に遊牧は、本當の遊牧へと發達したと述べている。

これにたいし原山氏は、前述のように狩獵の意義を大きく評價する立場から「殘滓」云々の部分を批判し、その言は不

適切だと述べた。<sup>(16)</sup> 私も「残滓」という考え方を批判する。しかし私は、以下のような観点から批判するのである。

## 2 ステップの狩獵

結論から言うならば、十一—十三世紀のモンゴル遊牧民の狩獵に關して、彼らが往時森林の民として狩獵生活を營んでいたとか、あるいはそうした森林民的な狩獵生活と關わりがあつたとかいうこととの關連においてのみ把握しようとすることに、私は大きな疑問を抱いている。<sup>(17)</sup> 私は、彼らの森林の民との關わりを全く否定、無視すべきだと言おうとしているのではない。かりに關係があつて、森林の民から、ステップの民への移行が行われたとしても、少くとも十二世紀中頃（これ以後史料がある程度豊かになる）から十三世紀にかけてのステップのモンゴル人の多くの部分が營んでいた狩獵というのは、單に森林民の狩獵經濟の残滓というような消極的なものではなく、それとは別の、ステップそのものにも豊かな獵獸が棲息しているというその自然條件に基づいて行われたステップ型ともいふべき遊牧民の狩獵であつたと思うのである。

モンゴル高原のステップの獸類について、モンゴル人民共和國地域のそれを中心に見てみる。現在、同地域の北部に主として分布しているタイガ帶や森林ステップ帶の森林には、ノロ（бер гөрөөс）、アカ鹿（марал буга）、オオ鹿（хандгай）、シャ香鹿（хүдэр）、ボツ（баавгай）、猪、山猫（мануул）、大山猫（шилүүс）、黑貂（булга）、貂（суусар）、リス（хэрэм）、シリス（жирх）、ハタリス（зурам）、チョウセンイタチ（солонго）、ヤマイタチ（ён）、クズリ（ээх）、狼、ユキウサギ（чандга）、その他が棲息している。またステップ地帯には、羚羊（黃羊）（цагаан зээр）、サイガ（бөхөн）、タルバガン（ステップ・マーモット）（тарвага）、ハタリス（зурам）、ノウサギ（гуулай）、狐、沙狐（хярс）、狼、アナグマ類（нохой илбэнх, чонон илбэнх）、アナグマ（дого）、その他が棲息している。コビ地帯では、コウジ（ウセンガゼル（хар суулт зээр）、羚羊（黃羊）、野生山羊（янир）、野生羊（аргал）、野生サウ（<sup>хөвдөн, хуучин</sup>тахь）、野生ロバ

(хүлэн)、野生ラクダ (хавтгай)、ゴビヒギア (мазагай)、狐、沙狐、ノウサギ、бозор (齧齒類?)、その他が棲息している。このほか鳥類も多数モンゴルにいる。<sup>(18)</sup>これらの鳥獣のうちかなりの種類が禁獵鳥獸または狩獵制限鳥獸となっているが、それは近年の亂獲による減少の結果、法的にそのような指定を受けるに至ったのであり、かつてはこれらはみな同地域に豊富に棲息していた。今、具體例をいくつかあげて説明しよう。

有名な野生ウマ (ブルジェワルスキー・ウマ) は、今やその姿はほとんど見られなくなってしまったが、十七—十八世紀には東部大平原やゴビに多数いた。<sup>(19)</sup>あるいは十七世紀までモンゴルの多くの土地に棲息していた。一六三五年にはヘンテイ・アイマクにもいたという。<sup>(20)</sup>これはステップとゴビのあらゆるところに分布していたに違いない。野生ロバは現在、アルタイ山脈以南のゴビを中心に棲息し、十頭位の小群を形成して動きまわっているにすぎないが、かつてはモンゴルの大半の地域に廣く分布し、數百頭、數千頭の群れをなし、畜群と混って草を食んでいたという。<sup>(21)</sup>

羚羊は現在、ドントゴビ・アイマクから東部大平原にかけて分布するのみだが、三十年前にはモンゴルの全ステップに分布し、森林ステップ、山岳ステップにまで深く入りこんでおり、數千頭の群れを形成し、おびただしくいた。<sup>(22)</sup>一九四〇年頃、モンゴル人民共和国側に約百萬頭、内蒙古側に約五十萬頭いて、數萬—十萬頭位ずつ毎年狩っていたという。コウジョウセンガゼルも、かつて多數いたが、今はゴビ地方やスフバル・アイマクに少數いるのみで、近年まで約一萬頭を毎年狩っていたという。<sup>(23)</sup>羚羊類に近いサイガは、藥用として價值のある角を狙われて亂獲され激減し、現在アルタイ山脈の南北のゴビの一部にいるのみだが、前世紀には多數いた。<sup>(24)</sup>

野生山羊は現在、アルタイ、ハンガイ、フブスグルその他の山岳地帯の岩石の多いところに分布しているが、かつてはもっと廣く分布し、年に數千頭を狩っていた。<sup>(25)</sup>野生羊は現在、アルタイ、ハンガイ、フブスグルの山地の起伏の多い岩山に棲息しているが、かつてはずっと廣い地域にいた。<sup>(26)</sup>

ノロは北部山地やアルタイの森林ステップを中心に多數が棲息し、かつて多數を狩っていた。<sup>(27)</sup>アカ鹿は、アルタイ、ハ

ンガイ、フブスグル、ヘンテイなどのタイガ、森林ステップ、高山帯にかなりいた。<sup>(28)</sup> オオ鹿は、これと同じ山岳地帯の森林に棲息している。<sup>(29)</sup>

タルバガンは森林ステップとステップに廣く分布し（タイガ、ゴビには棲息しない）、その数は亂獲で激減した今でもかなり多く、年間百萬頭位は狩られているが、十九世紀までは文字通り無數にステップにいた。<sup>(30)</sup> ウサギはモンゴル全域に多數棲息し、狩るのが容易なこともあり、多數狩られてきた。<sup>(31)</sup>

以上具體的に説明したものは、モンゴルの獵獸のごく一部にすぎないが、これらそしてこれら以外の獸類そして鳥類が、モンゴル高原には想像以上に多數棲息していたのである。銃器類等優れた狩獵用具が存在せず、亂獲も激しく行われなかったずっと昔は、狩獵對象となる禽獸はわれわれの考える以上に多かったに違いない。<sup>(32)</sup>

モンゴル高原のステップはその北部において、タイガ地帯がステップ地帯に移行する中間地帯を含み、そのためそこにはタイガが一部存在し、また廣大な森林ステップが廣がっている。<sup>(33)</sup> そこでこの部分の森林にはタイガ性の獸類がかなりの種類と數、棲息している。ステップのモンゴル人のかなりの部分はこうした森林ステップの草原部分に駐營し、これらの森林の獸類を狩ることをしてきた。だが、彼らは、それらを狩獵對象動物の一部としていたにすぎない。というのは森林ステップの草原部分が彼らの身のまわりに豊かに廣がり、また森林ステップより内陸部に純草原（ステップ）が廣がり、さらに内陸部にはゴビが海のように廣大な地域を占め、これらの草原地帯にも上述したような多くの種類の野獸が數多く棲息していたからである。森林ステップのモンゴル人それに純草原、ゴビに居住していたモンゴル人は、これらのステップ性の獸類をもまた狩獵していた。むしろ多くの地域では、これらのステップ性の獸類を専ら狩獵の對象としてきた。ステップのモンゴル人の狩獵は、森林民の狩獵とは自ら異らざるを得なかったのである。

廣大で開けたステップで俊足の野獸を捕えることの困難さを理由にあげて、ステップにおける狩獵の可能性を輕視する見方があるがこれは大きな誤りである。<sup>(34)</sup> ステップの遊牧民が現實に、ステップの俊足の野獸をいかに巧みに狩獵していた



かは、モンゴル発行の狩獵書を一、二冊讀めば、たちどころに理解できるはずである。<sup>63)</sup>

モンゴル高原の獸類について以上のようにみた上で、問題の時代の狩獵を分析しよう。

ルブルクは、

タルタル人は、その食物の大部分を狩獵から得ています。

と記している。<sup>64)</sup> そしてかれはタルタル人の食べる動物として、尻尾の短い鼠類、ソグルと呼ばれるマーモット、「猫のよ

うな長い尻尾を持ち、尻尾の先端に黒と白の毛のある」ウサギ、野ウサギ、羚羊、野生ロバ、アルカリなどをあげてい

る。<sup>65)</sup> ソグル *sogur* をロックヒルは多分サスリック *Mus citillus* であろうとし、また Pallas がモンゴル人はマーモット

の肉を好むと述べており、Gnard がロックヒルに *sogur* —— より普通にトルコ語で *sour* と記される—— がマーモット

の通常の名前であると語ったと附言している。<sup>66)</sup> ポターニンによれば、キルギス人の *suh* はモンゴル人のタルバガンと同

じだという。<sup>67)</sup> Gnard のロックヒルにたいする言とこのポターニンの記述から考えると、ソグルとはサスリックではなく、

明かにタルバガンのことである。つぎに「猫のような長い尻尾をもち、尻尾の先端に黒と白の毛のある」ウサギについ

て、ロックヒルはマルコ・ポーロの述べているファラオ・ネズミのことだと推測しているようだが、<sup>68)</sup> そうではあるまい。

モンゴルには二種類のウサギ、*чандара* (*Lepus timidus* L.) (ユキウサギ) と *бор туулай* または *туулай* (*Lepus tolai*

P.) (ノウサギ) がいるが、そのいずれでもない。これは「ビネズミ *алагдахай* (*Allactaga sibirica*)」のことを指してい

ると私は思う。明代の文獻にモンゴルの土産を記した中に「跳鼠」をあげ

惟質似兔而小、尾長、其端有毛、黑白相間、前足極短、行則跳躍。<sup>69)</sup>

と述べている。<sup>70)</sup> トビネズミは耳が少し長くウサギのようである。ファラオ・ネズミは、モンゴル人が考えているとおりタ

ルバガンであろう。<sup>71)</sup> 野ウサギとは言うまでもなく *туулай* (ノウサギ) のこと、羚羊とは *цагаан зээр* (黄羊) のこと、

野生ロバは *хулан* のこと、アルカリは *аркан* (野生羊) のことである。以上のルブルクが述べている動物に森林性のも

のは一も存在しない。カルピニはモンゴル人が狼、狐を食べると記しているが、これらは森林、ステップ雙方にまたがっている（狼はゴビにはほとんどいない）。

『黑韃事略』によると、モンゴル人の獵獸は、

其食<sup>レ</sup>肉而不<sup>レ</sup>粒、獵而得者、曰兔、曰鹿、曰野麋、曰黃鼠、曰頑羊其脊骨可爲<sup>レ</sup>杓、曰黃羊其背黃、尾如<sup>レ</sup>扇大、曰野馬如<sup>レ</sup>驢之狀、曰河源之魚、

とある。黃鼠はハタリスカ（タルバガンの可能性もないとはいえないのではないか）、頑羊は「其背骨可爲<sup>レ</sup>杓」とあるから、體格の大きい野生羊であろう。黃羊は「尾如<sup>レ</sup>扇大」とあるのがひつかかるが、まず羚羊（*uram 3ep*）であろう。野馬は野生ウマと思うが「如<sup>レ</sup>驢之狀」とあるので、あるいは野生ロバか。以上の獸類においても純森林性のものは鹿、野麋（イノシシ）位のもので、他はステップに多いか、またはステップのみに棲息しているものである。

つぎに『秘史』をみてみよう。アラン・コアあたりまでの古い時代を除くならば、そこに出てくる獵獸はやはり基本的にステップ性のものであったと思われる。チンギス・ハーンの第一次即位のさい、アルタン等が誓った言葉の中に、

oro'a görö'esün を卷狩すれば先驅して與えよう、ke'er-ün görö'esün の腹を一並びにくっつけて與えよう。qun-n görö'esün の太腿を一並びにくっつけて與えよう。

とあり、別の場所で述べられている同じ誓いの言葉の中には、

qada-yin görö'esün は前脚を一並びにくっつけて與えよう。

という一句が加わっている。<sup>(46)</sup>これらのうち oro'a görö'esün（捕えにくい野獸）<sup>(47)</sup>とは場所とは無關係の表現であり、qun-n görö'esün（「qun」の傍譯は「崖」または「山崖」）については qun の概念、qun と野獸の關係が今の所つかめない。これにたいし ke'er-ün görö'esün の ke'er は、傍譯に「曠野」とあり、辭書に「人里離れた土地」あるいは「廣大な土地」とあり、<sup>(48)</sup>現在 xəp tal (keger-e tal-a) と言えは地理概念としての「ステップ」を表わす。『秘史』における ke'er の用例

をみると「sari ke'er に下營した」とか、「sira ke'er に下營した」とあり、また「sira ke'er でタタルの民は宴會を催してゐて」とか、<sup>(61)</sup>「sari ke'er にいるジョ・ダルマラの馬群」とあるように、人が居住し牧畜も行っている「曠野」であつて、要するに草原（ステップ）である。従つて ke'er-in görösün とは「草原（ステップ）の野獸」と譯されるべきものといふことになる。また qada-yin görösün の qada は傍譯に「崖」とあるが、山にそびえ立つ巨岩をいう。<sup>(62)</sup> そのような所に棲息する野獸の代表は、野生山羊それに野生羊である。これらもステップとゴビの山岳地帯が、その棲息の主要地域となつてゐる。

『集史』のこの『秘史』の記事に該當する部分には、チンギス・ハーンがアルタン等に、

お前たちのために私はステップの禽獸を卷<sup>63</sup>狩し、お前たちの方に山地の禽獸を追立てた。

となつてゐる。<sup>(64)</sup> 兩文獻の文章の主語が逆となつてゐるが、それはともかく ke'er=ステップ、qada=山地という關係に立ち、大體對應してゐる。以上のように『秘史』の記述からもステップの狩獵が主要であつたと推測される。なお、チンギス・ハーン兄弟が若いときに行つてゐたことが知られてゐるタルバガン狩は純然たるステップの狩獵である。<sup>(65)</sup>

以上のように、モンゴル帝國建國後のモンゴル族の狩獵について記したルブルク、『黑韃事略』の記述、それにチンギス・ハーンの第一次即位の頃つまり帝國建國前のそれを記した『秘史』の記述から、ステップのモンゴル族が十二世紀後半—十三世紀に基本的にステップの獸類を狩つてゐたことがわかつた。このように帝國建國の前と後に差異がないのは、帝國建國前、チンギス・ハーンの一族、近縁諸族はヘンテイ山脈の南斜面、すなわちオノン川、ケルレン川上流域方面に居住し、帝國建國後しばらくしてからハーンをはじめ帝國の中心がハンガイ山脈東部すなわちオルホン川流域方面に移つたのだが、兩方面ともモンゴル高原北部の山岳地帯（モンゴル語でハンガイ *khantai* 地帯と稱する）に位置し、森林ステップ（山岳森林ステップ）が支配的であるが、また近くにステップも迫つてゐるという自然をもち、基本的に住環境に差異がなかつたことが大きく關係してゐると思う。相異點があるとすれば、ヘンテイ山脈にはタイガが大きな廣がりを見せてゐるが、

ハンガイ山脈東部のそれは小さいという點であらう。<sup>69</sup>

今まで述べてきたことによつて、ステップには森林の獸類と共通のものもあるが、また獨特の種類のものも多數おり、全體として驚くほど多數の獵獸（鳥類も無視できない）が棲息していたこと、十二世紀後半—十三世紀のステップのモンゴル族は、それらのステップの動物を主として狩っていたこと、がわかつた。私はこれらの點から、この當時彼らの行つていた狩獵は、森林の狩獵民の行つていたような狩獵とは、随分大きく異なるものであつたとみたい。當時森林の民は、鹿類を狩り、貂、リス等の毛皮獸を狩り、また海東青を捕獲していた。<sup>70</sup>

このようにステップの動物を主要獵獸とするステップの狩獵というものを彼らステップのモンゴル族が行つていたとすれば、當時の彼らの狩獵を森林の「狩獵生活の殘滓」として把握することは誤つていると思われる。モンゴル族全般がかつて森林の狩獵生活を行つていたことがあつたとしても、そしてまた當時も森林の狩獵生活を営んでいたモンゴル族のグループがあつたとしても、十二世紀後半—十三世紀にステップのモンゴル諸族が行つていた狩獵というのは、そのような森林民の狩獵ではなく、前述したように、ステップの動物を主要獵獸とする狩獵であつたから、すでに森林の狩獵とは大いに異なるステップの狩獵となつていたと考えられるからである。それは今や、殘滓というような消極的、衰退的傾向にある狩獵とは質的に異なるタイプのステップの狩獵として盛んに行われるようになっていたのである。

實際、以下に述べる通りウラジミルツォフの考えとは異つて、ステップのモンゴル族の狩獵は一向に衰退して行かなかつたのである。

まず、すでに引用したルブルクの記述は、モンゴル帝國建國後約五十年経つたときのものであるが、モンゴル人が食物の大部分を狩獵から得ていたほどだと指摘している。ルブルクの時代から約二十年後元朝に入り、以後一二九〇年頃まで中國に滞在したマルコ・ポーロは、モンゴル人の食い物について、

彼らの常食は肉と乳、それに狩獵の獲物である……

と述べた。このように一世紀—三世紀の末期において狩獵の意義が低下してきていたとは思われない。

狩獵の役割が著るしく低下したようにウラジミルツォフによって述べられている明代に至っても、状況に目立つ變化は認められない。『北虜風俗』に、

若<sup>ニ</sup>夫<sup>ニ</sup>射獵<sup>一</sup>雖<sup>ニ</sup>夷人之常業<sup>一</sup>哉、然亦頗知<sup>ニ</sup>愛<sup>ニ</sup>惜<sup>ニ</sup>生長<sup>ニ</sup>之道<sup>一</sup>、故春不<sup>ニ</sup>合圍<sup>一</sup>、夏不<sup>ニ</sup>群蒐<sup>一</sup>。惟三五爲<sup>ニ</sup>朋<sup>一</sup>、十數爲<sup>ニ</sup>黨<sup>一</sup>、小襲取、以充<sup>ニ</sup>饑虛<sup>一</sup>而已。及<sup>ニ</sup>至<sup>ニ</sup>秋風初起塞草盡枯<sup>一</sup>、弓勁馬強、獸肥隼擊、虜酋下<sup>ニ</sup>令<sup>一</sup>、大會<sup>ニ</sup>蹄林<sup>一</sup>、千騎雷動、萬馬雲翔、較<sup>ニ</sup>獵陰山<sup>一</sup>、十旬不<sup>ニ</sup>返<sup>一</sup>、積<sup>ニ</sup>獸若<sup>ニ</sup>丘陵<sup>一</sup>、數<sup>ニ</sup>衆以均分<sup>一</sup>、此不易之定規也、然亦有<sup>ニ</sup>首從之別<sup>一</sup>、如一獸之獲、其皮毛蹄角以頒<sup>ニ</sup>首射<sup>一</sup>、旌<sup>ニ</sup>其能<sup>一</sup>也、肉則瓜分同<sup>ニ</sup>其利<sup>一</sup>也……

とあり、當時もモンゴル人は「常業」として狩獵に従事していた。同書にはまた、

稍長、則以<sup>ニ</sup>射獵<sup>一</sup>爲<sup>ニ</sup>業<sup>一</sup>、晨而出、晚而歸、所<sup>ニ</sup>獲禽獸<sup>一</sup>、夫既食<sup>ニ</sup>其肉<sup>一</sup>、而寢處<sup>ニ</sup>其皮<sup>一</sup>矣。

とあって、やはり、彼らの業として非常に熱心に狩獵が行われていた有様を知ることができる。また注意すべきはウラジミルツォフが「傳説の領域に退いてしまった」と述べた「大規模な卷狩」が毎年盛大に行われ、その獲物も「積<sup>ニ</sup>獸若<sup>ニ</sup>丘陵<sup>一</sup>」と表現されているほど實に豊かであったということである。モンゴル人が狩獵をよく行い、こうした大規模な卷狩を行っていたことを述べた史料は、これ以外にもある。すなわち『譯語』に、

虜善<sup>ニ</sup>獵<sup>一</sup>、覬<sup>ニ</sup>獸所<sup>一</sup>在、則集<sup>ニ</sup>衆合圍<sup>一</sup>、多至<sup>ニ</sup>萬人<sup>一</sup>、或數千人、或數百人、……僵禽斃獸、爛若<sup>ニ</sup>積磧<sup>一</sup>、此正彼之爲<sup>ニ</sup>生也。

とあるのがそれである。

これらの史料から、明代のモンゴル人も引續き狩獵を常業として常時熱心に行いその獲物を食料その他に利用し、一方大規模な卷狩もあいかわらず行われていたことがわかる。それは氣晴し程度のものとか、「食料の獲得が大變困難な状態で行われた」というようなものでは全くなかったのである。

要するにステップのモンゴル族は、十二世紀後半からずっとのちまで終始一貫して狩獵を盛んにそして熱心に行い、そこに衰退傾向というものを認めることはできない。<sup>61)</sup> ステップのモンゴル族の狩獵は、ステップの狩獵として確立し、ステップの豊かな動物を主要な対象として行われていたため、このように衰えることなく、遊牧と並ぶ經濟の重要な分野であり続けたのである。

こうしてモンゴル族はずっと遊牧狩獵民であつたということが出来る。ただしこの場合ウラジーミルツォフの言う「遊牧狩獵民」とは、内容的、時間的に異っている。内容的には、彼の言うような遊牧＋森林の狩獵ではなくて、基本的に遊牧＋ステップの狩獵であつた。時間的には、モンゴル族が遊牧狩獵民であつたのは、彼の言うように十三世紀までであつたのではなく、少くとも十四—十七世紀までであつたと思われる。

### 3 モンゴル族の狩獵と他の遊牧諸族の狩獵

モンゴル族の狩獵をこのように考えるならば、それを、彼らに先立つモンゴル高原のステップの遊牧諸族のそれと同じものとして把握することが可能となるであらう。

この地域のステップの遊牧諸族は、匈奴以來狩獵を遊牧と並ぶ重要な仕事としていた。匈奴は、

其俗寛則隨<sup>レ</sup>畜、因<sup>ニ</sup>射<sup>ニ</sup>獵禽獸<sup>一</sup>、爲<sup>ニ</sup>生業<sup>一</sup>。

とあつて、<sup>62)</sup> 狩獵を生業の一とし、烏桓、鮮卑も、

俗善<sup>ニ</sup>騎射<sup>一</sup>、弋<sup>ニ</sup>獵禽獸<sup>一</sup>爲<sup>レ</sup>事。

とあつて同様であり、<sup>63)</sup> 突厥も、

以<sup>ニ</sup>畜牧射獵<sup>一</sup>爲<sup>レ</sup>務。

とあつて、<sup>64)</sup> 狩獵は遊牧とともに彼らの「務」であつた。これらの獵獸は、匈奴について、

兎能騎<sup>66</sup>羊、引<sup>レ</sup>弓射<sup>レ</sup>鳥鼠、少<sup>レ</sup>長、則射<sup>レ</sup>狐兔、用爲<sup>レ</sup>食。  
とあり、鮮卑について、

鮮卑衆日多、田畜射獵、不<sup>レ</sup>足<sup>レ</sup>給<sup>レ</sup>食。

とあるように、<sup>66</sup>遊牧民の重要な食糧源となっていた。

契丹についても狩獵の重要性を示す史料がある。すなわち、

朔漠、以<sup>レ</sup>畜牧射獵爲<sup>レ</sup>業……自<sup>レ</sup>遼有國……遊田之習、尙因<sup>レ</sup>其舊<sup>67</sup>。  
であつたのであり、また、

隨<sup>レ</sup>水草就<sup>レ</sup>畋漁<sup>68</sup>。  
であつたのである。

古くから北方モンゴル高原のステップにおいて強大さを誇った遊牧民のそれぞれと交流し、彼らから多くの情報を手に入れた中国人が、右のように遊牧諸族が狩獵を遊牧とともに「生業トナス」「事トナス」「務トナス」「業トナス」という程度に行っていたと述べているのである。従つてこの地域のステップの遊牧民というのは、古くからずっと遊牧狩獵民であつたと推測されるのである。彼ら遊牧民の狩獵がタイガ的なそれと異なるものであつたことは言うまでもないであらう。

こうして私はこの點からも、十二世紀後半―十三世紀そしてそれ以後のステップのモンゴル族の狩獵は、かつて彼らが營んでいたかも知れない森林民のそれと同じままでのものであつたとみることは否定されるべきであり、彼ら以前の匈奴以下のモンゴル高原のステップに活躍した遊牧諸族の狩獵の傳統を受け繼ぐものとなつたと思ふのである。

さて、前述した北方遊牧諸族は、それぞれ強大であり、モンゴル高原のステップの一部または全部、さらには他の地域にまで進出し、北方に覇を唱えた。従つてステップの遊牧民としての彼らの經濟は、家畜を十分わがものとして飼育し、

その牧畜は遊牧民と稱するにふさわしい一定のレベルに達していたはずであろう。ところが今、史料を提出して述べたように、狩獵を同時に盛んに行っていたのであって、その意義は、十一—十三世紀當時のステップのモンゴル族の場合と基本的に同じであったようである。

そうであるとすれば、ここで十一—十三世紀のステップのモンゴル族の遊牧の問題も、考えなおさなければならぬのではないかと思われる。つまり、當時のステップのモンゴル族が狩獵を盛んに行っていたことをもって、遊牧經濟に問題ありとし、本當の遊牧民でないなどとする考えは妥當であろうか。

そこで以下に、この遊牧の問題について検討してみることにする。

## 二 遊牧の問題

### 1 ウラジーミルツォフの考え

遊牧の基礎の一つは家畜である。ウラジーミルツォフは、モンゴル族の家畜の問題について、つぎのように考えている。

「十一—十三世紀のモンゴル遊牧民の主要な仕事は、牧畜と狩獵であった。これは遊牧民であり、同時に狩獵民であった。だがそれでも彼らの經濟生活の基礎は、牧畜であった。モンゴル遊牧民は、牛、羊、山羊および馬を持っていた。ラクダは少く、ともかくトラ川、ケルレン川、オノン川の河畔に住む者にはそうであった。多數のラクダが現われたのは、チンギス・ハーンのタングート征伐後であった。」<sup>69</sup> つぎに、「最も高く馬が評價された。馬群は古代モンゴル人の主要な財産であった……」「しかしモンゴル人の、ともかくテムチン・チンギス・ハーンが生れた一族に最も近い關係のある一族の所有した馬群の數量は、はじめは恐らく大きくはなかったらしい。少くともそれは疑いもなく、チンギス・ハーンの



國家の成長とともに増加したのであった。」と述べ、その馬が少かったと思われる證據をあげている。<sup>(7)</sup>

「牛も移動手段として用いられた。つまり雄牛と雌牛を幌車につけたのである。羊に至るところで、肉、毛皮、毛のために所有した。……當時のモンゴル人が所有していた家畜の數量、とりわけ牛の數量についての正確な資料は存在しない。われわれの資料中から引用し、前にも言及した唯一の數字は、幾分か大きな意義をもっている。それは、去勢された羊を追いつて來た外國商人についての話であるが、その數は——特筆できるのだが——とるに足らず、千頭であった。彼にはさらに、一頭の白ラクダがいた。」<sup>(7)</sup>ウラジーミルツォフはこの記述から、多分當時羊の頭數が多くなかったと述べたいのであろう。

こうしてラクダが少く、チンギス・ハーン周辺の馬も乏しく、また羊も少かったということになり、そこで彼は結局、「十一世紀—十三世紀のモンゴル人は、遊牧經濟だけでは暮して行けなかった」と述べたのである。<sup>(7)</sup>そしてこの彼の見解の根底には、前章において述べたように、モンゴル族の經濟の流れの大筋を、森林の狩獵經濟からステップの「本當の」經濟への移行としてとらえる考え方があつた。そこでその移行過程にあつた十一—十三世紀にあつては、狩獵はその意義が低下しつつも一定の役割をもち、これにたいし遊牧は、成長過程にあつたものなお十分には一人だちできない段階にあつた。こうして當時のモンゴル人は「遊牧經濟だけでは暮して行けなかった」と考えたのである。

以下にウラジーミルツォフのこの見解の當否を検討してみたい。

## 2 モンゴル族と家畜

『契丹國志』につきのような史料がある。<sup>(7)</sup>

正北至蒙古里國、國無君長所管、亦無耕種、以弋獵爲業、不常其居、每四季出行、惟逐水草、所食惟肉酪而已、不下與契丹爭戰、惟以牛羊駝馬皮裘之物與契丹爲交易、南至上京四千餘里。

これによると、前半に「以弋獵爲業」とあって、モンゴル人が十一世紀前半にあたかも狩獵民であったように思われるが、後半の記述から遊牧も立派に行っていたことがわかる。すなわち「不常其居、每四季出行、惟逐水草、所食惟肉酪而已」とあり、「水草を逐う」というのだから、ステップに居住していて移動を行っていたのであり、「四季ごとに出行す」とあるから、それは定期的な移動を行うかなりしつかりした遊牧であつたらしいことがわかる。また「肉酪」を食べていたとあるから、牧畜生産物が、その生活に利用されていたのである。しかも契丹との交易品として「牛羊駝馬」が出されていたことから、早くも十一世紀前半からモンゴル族がそれら牛、羊、ラクダ、馬を飼養していたことを知るのである。

このようにこの史料から、既に十一世紀の前半にモンゴル族が狩獵を行いつつステップ地帯に居住し、羊、馬、牛、ラクダを遊牧的方法によって飼育していたことなどがわかるが、その畜産が交易品として出し得るほどであつたことは、このさい特に注目すべきであらう。これによって、當時彼らの間に飼育されていた家畜が比較的多かつたのではないかと推測できるからである。

同様に遼の史料で、十二世紀前半の頃のモンゴル族の生活をうかがわせるものがある。

(保大) 四年春正月、上趨都督馬哥軍、金人來攻、棄營北遁、馬哥被執、謨葛失來迎、驢馬駝羊、又率部人防衛、時侍從乏糧、數日以衣易羊……封謨葛失爲神于越王。

文中の「謨葛失」は人名として登場しているが、王國維が考證したように「蒙兀室韋」すなわちモンゴルのことである。この史料によって、保大四(一一二五)年當時モンゴル人が馬、ラクダ、ヒツジを飼育していたことがわかる。

ところが、この記述の直後の時期に滿洲で入手した情報に基づいて著わされた『松漠紀聞』に、

盲骨子、其人長七八尺、捕生麋鹿食之、金人嘗獲數輩至燕、其目能視數十里、秋毫皆見、蓋不食煙火、故眼明、與金人隔一江……

とみえる。この記述によると、モンゴル族が十二世紀に入ってもなお「麋鹿」を捕生してその肉を食べており、彼らが一見畜産の乏しい森林の狩獵民的生活を営み、遊牧民的色彩が薄かったように思われる。

だがこの時代、すなわち十二世紀の中頃は、テムジン生誕を溯ること遠くなく、モンゴル側の文獻の記述にも史料として使いうるものが増えてくるのであるが、それによると、ステップのモンゴル族と森林の民の交流が浅くないことを示す記述が存在するといえ、ステップのモンゴル族自身はかなり早くから遊牧生活に深く関わっていたことがわかるのである。

『集史』によると、寡婦ムヌルン（ドウトム・メネンの妻だった）には、

馬と（他の）家畜が非常に多かったので数えることができなかった。だが、彼女が坐していた山頂から大きな河があった山麓まで、地面が全部蹄で覆われてしまうほどの家畜が入りきると彼女は言った。「全山すべて残らず！」と

——またそうでないときには、彼女は家畜群の探索に出かけるように命じた。

とある。ムヌルンは『秘史』においてはノムルン *nomun* とあり、メネン・トドンの子カチ・クルクの妻であり、二人の間から、ハイドゥが生れたとある。チンギス・ハーンを溯る七—八世代前である。

一方『元史』においてもこれと似た傳承が記され、*莫罕倫* の馬群が押刺伊而部に奪われ、彼女の第七子の納眞が奪い返えしに出かけたところ「至一山下、有馬數百」とある。これが奪われた馬の全體か一部なのか不明である。

この傳承をそのままチンギスの七—八世代前の史實を傳えたものとみるのは危険である。だがそこに彼の數世代前のモンゴル族の遊牧の状況についての反映を讀みとすることは許されよう。つまりチンギスの數世代前にモンゴル族が遊牧と相當の關係があったので、この種の傳承が残されたとは私は解釋するのである。こうみてくるならば、ハイドゥについても「數えきれぬほどの數の從屬的な妻、家畜群および馬群」を所有したとの言い傳えが残されており、これも注目される。

以上のように、早くもチンギス・ハーンの數世代前にはモンゴル族の間に大畜群の所有者がいたとの言い傳えが、いく

つか残されていたということは、早くからモンゴル族が遊牧とある程度深い關係を持っていなければ、ありえなかったであらう。従つて前引の『松漠紀聞』の記述の内容をそのままに受けとることはかえつて誤解であつて、むしろ遼代の史料に記されていた状態が、その後續いて十二世紀後半に至つたとみるのがよいと思う。

つぎにこのような考察結果に基づいて、個々の家畜について検討してみたい。

羊についてはウラジミルツォフは、既述のように十一—十三世紀のモンゴル人の間に餘り多くなかつたとみているようだが、その考えの根據は、

オングトのアラクシ・デイギド・クリのところからアサン・サルタクタイが白いラクダを含む千頭の去勢成羊を追ひ立ててエルグネ川の流れに従つて黒貂とリスを買い求めに來たとき、チンギス・ハーンがバルジュナに畜群に水を飲ませてゐるのに出合つた。

とある『秘史』の記述だが、<sup>63</sup>私にはこれがモンゴル族の羊の少いことの直接的な根據になるとは、どうしても思えない。私の考えるところでは、<sup>64</sup>少くとも十二世紀後半の頃には、被支配的立場にあつた者たちの間にも羊群を所有している者がいたのである。『秘史』によれば、タイチウト族のウルス・イルゲンすなわちタイチウト族に屬していた民であるスルドス族のソルカン・シラは、自分の宰領によつてテムジンに *telee quirgan* (二匹の母羊の乳によつて養われた肥えた子羊) を殺して煮て與えることができた。<sup>65</sup>これからみて、ソルカン・シラは一定頭數の羊群を飼養していたのだが、その羊群から刈りとつた毛は、車に乗っているテムジンとソルカン・シラの娘の體をかくすに足る量があつたのである。同じことは、カブル・ハーンの子のクランの子であるイエ・チェンの馬飼いバダイとキシリクが *telee quirgan* を殺して料理した記事からも読みとれるかもしれない。

帝國建國後になると、このことははっきりと史料の上に記されるようになってくる。ルブルクは、

大君主たちは南方に村々を持っていて、そこから、冬の食用にする黍と小麥粉とがかれらにもたらされます。貧民た

ちは、「それらを」、羊・毛皮と交換に調達いたします。

と報告している。<sup>(9)</sup>これによって、「貧民」でさえ黍とか小麦粉などの穀類を入手するために手持ちの羊を交換に出しうる程度の餘裕があったことがわかる。ルブルクはまた、

富裕な人々は、着物に、とても柔かくて軽く、暖かい絹の詰め綿を入れます。貧民たちはその代りに、木綿と、粗毛からよりわけてとれる柔毛とを詰めます。粗毛からは、住居や荷物箱をおったり、寝具類をつくるのに使うフェルトをこしらえます。……またフェルトで、鞍當て・鞍敷き・雨外套をつくります。つまり、タルタル人は非常に多量の羊毛を使用するというわけです。

と述べている。<sup>(10)</sup>このように貧民でもかなりの量の羊毛を使用しているということは、言うまでもなく彼らが羊をかなり所持していたことを意味する。カルビニが、

タルタル人は家畜、つまり駱駝・牛・羊・山羊に大變にめぐまれています。

と述べているのは、<sup>(11)</sup>何ら誇大な表現ではなく當時のモンゴル人の家畜所有の實情を割合正確に把握した上での記述であるといえよう。

こうして十三世紀に帝國が建てられたのち、羊は貧富を問わずモンゴル族の間に廣くそして相當數多く飼養されていたと考えられるのだが、この事實は、それに先立つこと程遠くない十二世紀後半のソルカン・シラの羊群の存在を推測した私の考えを補強するかもしれない。バダイ、キシリクのそれについても同様である。かくして私は少くとも十二世紀後半—十三世紀については、ステップのモンゴル族の飼育した羊を餘り多くないとするウラジミルツォフの考えに反對したい。

山羊については『祕史』に何箇所か出てくるが、<sup>(12)</sup>山羊というのは近年の場合からみて、羊の陰にかくれて表面に出てこない場合がある。<sup>(13)</sup>『祕史』の時代もそうであつたろうことは、ゴンゴルも推測している通りである。<sup>(14)</sup>私としては、『祕史』

に「子山羊のすねの皮をも残さずに……」とか、「子山羊のすねの骨も獲得できないのに……」とある表現から、またオン・ハーンが困窮していたときに山羊の乳を飲んだとあり、さらにルブルクはモンゴル人の多用の毛皮の衣服の「風雪のあたる外側」の方に用いる毛皮について、

貧民たちは外側のものを犬と山羊の皮でこしらえます。

と記しているから、山羊は家畜の中では肉の點でも乳の點でも、また毛皮の點でも最も價值が低くみなされていたと私は考える。貧民でも毛皮外套に犬とともに山羊の毛皮を用い得たということは、それがごくありふれた家畜であったことを意味するであろう。先に引用したカルピニの記述にモンゴル人が他の家畜と同様山羊にめぐまれていたとあることも注意すべきである。またこの山羊のことからそれ以外の羊等の家畜が一般モンゴル人の普通の家畜として食料その他に用いられていたことが浮彫りにされるであろう。

牛については、その多寡をウラジミルツォフは何ら具體的に述べていない。

牛は、モンゴル族の居住地が一貫して山岳の森林ステップおよびその近くに位置していたことからみて、彼らに相當多く飼育されていた可能性がある。だが帝國建國前の史料は不足しており、當時の牛の飼育の實態を知ることが容易でない。『秘史』によると、困難な狀況下において、九頭の馬しか持っていなかったとされたテムジン<sup>(97)</sup>の家に、車を牽いていた牛が少くとも一頭あり、同じく帝國建國前、タタル族を討滅した頃、ホエルの幕舎附近でジェルメラが牛を食うために殺していた。ところがこのような記述が存在する一方で、第一次即位の直後チンギス・ハーンが定めた役職の中に、羊飼と馬飼は存在したが牛飼は見當らないのである。帝國成立の第二次即位のときにはオルダ内に、馬飼、羊飼はもとより、ラクダ飼、牛飼も存在した。

思うにやはり牛は早くから一定の重要性を保持していたであろう。『秘史』には先にあげた例のほかにも車または車の譬え話が頻出する。アラン・コアの乗っていた車は別にしても、メルキト族のイエ・チレドに嫁したホエルンが乗って

いた車、スルドス族のソルカン・シラの所持し、羊毛を積んでいた車、テムジンとジャムハがメルキト族襲撃後仲良くすること一年、翌年夏兩者が移動をはじめたときに使用した車、テムジンが第一次即位の頃所持していた家車、フイテンの戦いのさいタイチウト族のアウチュ・バートル、コドン・オルチャンらのものと思われるクリエンの中に存在した、タラク（ヨールト）の入った桶が積んでいた車、この戦いで逃亡したタイチウト族のタルグタイ・キリルトクが捕えられて乗せられていた車、チンギス・ハーンがオン・ハンを問責した言葉の中に出てくる譬え話としての移動用の車、スベエテイ・バートルの鐵車などである。

當時、牛のみが車を牽いていたのではない。オングラト族は早くからラクダ車をもっていたようであるし、帝國建設後間もない頃チンギスの母ホエルンもラクダ車を利用してゐた。だがステップのモンゴル族の主たる居住地が山岳森林ステップであつたことから判断して、ラクダ車の方が牛車より多かつたとは考え難い。なぜならば近年の状況について「ハンガイの森林、草原地方の牧民は、去勢牛を車を牽かせるために小さい年齢のうちから訓練し、遠距離および近距離の輸送に廣く用いる習慣があつたのである」とか、「ゴビ、草原地帯に居住しているハルハの約七十の旗はラクダ輸送によつており、ハンガイ地方の三十以上の旗は牛車を動かしてゐたのである」とか述べられているように、本來坂が多く岩も多い山岳地のハンガイ地帯では、力が強く、また強い蹄をもつた牛がむいてゐるからである。

帝國建國後のことだが、カルピニによると住居を、

一臺の車に積んで運ぶさい、小さい方のものなら牛一頭で充分ですが、大きい方のものになると、その大きさに應じて三頭、四頭、またはそれ以上さえ要します。タルタル人は何處へ行くときでも……いつでも自分の住居と一緒に持つてゆきます。

とあり、またルブルクには、

富裕なモンゴル人つまりタルタル人は、一人で、大箱を積んだこうした車を一〇〇臺乃至二〇〇臺持っているといえ

ましよう。

とある。<sup>(11)</sup> こうした牛車の利用というものは、帝國建國前のそれから大きく隔ったものではなからう。

このように考えてくると、帝國建國前のモンゴル族は車を相當多くもち、従つてそれを牽く牛もまたかなり多くもつていたと思われるのである。

帝國建國後についてみると、カルピニ、ルブルクの右の引用記事それにまた彼らの別の報告から車の牽引用として牛がラクダとともに數多く利用されていたことが推測されるが、またこの時期乳畜として牛が澤山飼養されていたことを示す報告もあるのである。それはやはりルブルクの報告の中に見出されるものであるが、彼はモンゴル人の住居について述べている中で、天幕の女の席（東側）には、

自分の従者や女たちの方を向いた小像を、それぞれ置きます。女の側には、入口のそばに、牛の乳房を持った偶像がもう一體ありますが、これは牛乳をしぼる女たちのためのものです。牛乳をしぼるのは女たちの役目だからです。入口の反対側、男たちの方（天幕の西側—引用者）には、馬乳をしぼる男たちのために、馬の乳房を持った別の偶像があります。

と注目すべき報告を行っている。<sup>(12)</sup> このような「牛の乳房を持った偶像」、「馬の乳房を持った偶像」をカルピニも「フェルトでこさえた乳房の模型」として報告し、モンゴル人は、

これらが家畜を守り、乳と仔獸とを恵んでくれると信じています。

と記している。<sup>(13)</sup> これらによって、當時牛がモンゴル族の家に廣く飼育され、その頭數の増加が望まれており、乳畜として馬と並んで極めて重要な存在であったことがわかるのである。

以上の諸點から判斷して、私は、牛は十二世紀の後半にはすでにかなり飼育されていたに違いなく、帝國建國後には益々熱心にそして盛んに飼育されたものと思う。<sup>(14)</sup>



ラクダは、本來ゴビに最も適した家畜であるから、確かに山岳森林ステップを根據地としていたステップのモンゴル族に餘り多くはなかったであろう。だがそれを過度に少かったとみるのは危険であろう。山岳森林ステップというのはラクダを全く寄せつけない場所でない上に、史料的にみても、それは遼代の二文獻に早くも登場していたし、それに、既述のホエルンのラクダ車の存在といった例もあげうるからである。

馬については、ウラジミルツォフは「馬と馬群についての語は『秘史』にあふれている」と述べながら、既述のように「しかしモンゴルの、ともかくテムチン・チンギス・ハーンが生れた一族に最も近い關係のある一族の所有した馬群の數量は、はじめは恐らく大きくはなかったらしい」と述べ、若干の支持を集めているが、この考えの根據として彼は「たとえばチンギスの父のイエスゲイ・バガトウルは、自分の長男の嫁をめとるために、彼を連れて馬で出かけた。婚約を結ぶにさいし、彼は息子の將來の妻の父に、一頭の豫備馬を手渡した。テムチンとその兄弟には青春時代、既に種々の不幸からやや立ち直っていたときだが、全部で八頭の去勢馬と一頭の馬がおり、これに乗って彼らはタルバガン狩に出かけた。その後メルキト族がチンギス・テムチンのキャンプを襲撃したとき、彼にはただ一頭の豫備馬があつたにすぎず、妻のボルテのために馬が残っていないことがわかつたのである」と述べている。

ウラジミルツォフには、イエスゲイがデイ・セチエンに一頭の馬を與えたことが、その所有馬群が少かつたためだと思われたのである。だがこの一頭の馬が本當に結納を意味するのか、結納だとしても馬以外に本當に何も與えなかつたのかなど、これからだけではなかなか斷じにくいと思う。また當時モンゴル族の間で一頭の馬を結納として與えたことが少いと言えるのかも問われるべきであろう。つぎのメルキト族によるボルテ掠奪事件についても問題が多い。すなわちイエスゲイ没後間もなくからずと、テムジンたちには「九」頭という象徴的な數(當時、三、九という數はしばしば「多い」という意味で用いられた)の去勢馬がいたこと、ボオルチュがヌフルとしてテムジンのところに來たとき乗っていた「前かがみの黄色味がかった栗毛の馬」がいたはずなのに無視されていること、またなぜテムジンは妻を置きざりにしてまで引き

馬を伴わなければならなかったのかの理由が不明であることなど、種々の疑問點があり、要するにこの話をもつて直ちに馬の多寡は論じられないと思う。

ウラジミルツォフが述べているようにチンギス・ハーン周邊の馬は「チンギス・ハーンの國家の成長とともに増加したのであった。」そしてモンゴル帝國建國後には、彼そして彼の子孫を中心としたモンゴル族のもとに、膨大な量の馬群が集つてきたのであり、これについて記した史料は數多く存在している。<sup>(33)</sup> 勿論こうした狀況は、これに先立つモンゴル高原を制覇した遊牧諸族のいくつかにも生じたであろう。多分これらに比べれば、通常の遊牧諸族の所有した馬の數は總て少いということになつてしまふであらう。従つて判斷の基準は、チンギス・ハーンに近縁の諸集團の馬群が、こうした一般遊牧民のそれと比べてどうであつたか、ということではならぬ。

このことを知るのも、實は容易でない。私としては、この場合、チンギス・ハーンに近縁の人々および彼らが率いる集團（オボフ、ウルス、クリエン）がいかなる勢力をもつていたかを知ることが大切であると思う。周知のごとく、チンギスの曾祖父カブル・ハーンはモンゴル族初代の部族長であつた。その子クトラは第三代の部族長になつた。イエスゲイはクトラなきあと、モンゴル族内で有力な存在であつた。このようにチンギスに近縁の者は、モンゴル族内で強勢を誇つていた。このようなカブル・ハーンそしてその子孫及び彼らが率いた集團の所有した財産、その柱である馬群が少かつたと考えるのは、餘りにも不自然である。カブル・ハーン、クトラ・ハーンなどが部族長の地位にあつて獲得した財物は膨大な量にのぼつたはずであり、そのことは、カブルの子孫および彼らが率いた集團（オボク、ウルス、クリエン）換言すればチンギスの近縁の人々および彼らの率いた集團の驚くほど激しい分裂、そしてその結果としての數の多さに如實に示されて<sup>(34)</sup>いる。この分裂は、ジュルキン族の場合から明確に知られるように、財産の分與という形で行われたのであつた。従つて彼らの間に多くの馬群も保有されたと私は考える。

また以下の諸例も參考とならう。すなわちチンギスはメルキト襲撃後ジャムハとともに馬飼をもつていたし、<sup>(35)</sup>第一次即

位のさい去勢馬<sup>ア、タ</sup>係りと馬飼<sup>ア、タ</sup>を定めたが、同じ頃それとは別に、彼の隸民<sup>ゴバル</sup>であったジョチ・ダルマラにも馬群<sup>(33)</sup>がいた。またケレイトとの決戦が行われた頃、カブル・ハーンの孫でケレイト族に組していたイエ・チェレンには、少くとも二人の馬飼<sup>(34)</sup>（バダイ、キシリク）が仕え、馬群の世話をしていた。また同じとき、チンギス・ハーンの弟カチウンの子アルチダイにも二人の馬飼<sup>(35)</sup>（チギダイ、ヤジル）がいた。

私は以上の點からみて、チンギス・ハーンの近縁の人々および彼らが率いた集團に、通常の遊牧民の場合に比べて馬群が少かつたとは思えないと思う。

さて、當該の時期のモンゴル族の遊牧の未發達、その結果としての家畜數の不十分さの證據として、原山氏はモンゴル人が自己の家畜の減少を防ぐために家畜の屍肉食用を習慣とし、ハレの場合以外はそれを屠殺しなかつたとして、ルブルクが「彼らの食物についていうと、彼らは無差別的に死んだ動物の肉を食べる。多くの羊や牛の群がいるので、たくさん動物が死ぬことが避けられないのである」と言い、馬か牛が死ぬとすぐにその肉を加工して保存用食肉とすると述べていることをあげている。<sup>(36)</sup>

しかし私はそのようには考えない。モンゴル族は傳統的に夏秋は主に乳製品を食べ、畜肉はほとんど食べず、逆に冬春は肉を主に食べていた。<sup>(37)</sup> 清代の史料にも、

多則食<sup>レ</sup>肉、夏則食<sup>レ</sup>乳。

とか、あるいはまた、

夏秋酪漿、冬春羶肉。

と記している通りである。この食習慣はモンゴル帝國時代に早くも確立されていたのであつて、それはカルピニに、

冬には……夕方には、肉汁を飲みます。……夏には、馬乳を多量に持っているので、肉は減多に食べません。

とあり、ルブルクも、

夏には、コスモス酒つまり馬乳がすこしでもある限り、それ以外の食物のことは気にしません。その間に牛か馬が死ぬようなことがあると、その肉を薄く細く切つて吊るし、太陽・風にさらして乾かします……馬の腸から、豚のよりも上等の腸詰めをつくり、つくりたてを食べます。残りの肉は多用に保存しておきます。

と述べていること<sup>(44)</sup>によって確かめられる。夏に斃死した畜肉さえ、腐りやすい内臓を除いて多用に保存していたことに、多に肉を食べる習慣の嚴守ぶりをうかがうことができる。ルブルクはこの記述の直前において、既に引用された、かれらは死んだ動物をどれこれの區別なく食べますが、澤山の羊牛〔家畜〕群がおれば、自然、非常に多くの動物が死ぬことになるのはおわかりでしょう。

という記述を行っているが、これは所有家畜が多いモンゴル人には家畜の斃死が多く生じてしまうのでその屍肉を食べるといっているのであって、家畜が死んだ場合のみ肉を食べられるということの意味しているわけではない。それに、夏に死んだ家畜の肉を乾燥することは早い時期に必要な措置だが、その乾燥肉を冬のためにとっておくのは、肉を惜しんでのことではなく、その時期馬乳酒があるのでその肉を「氣にし」ないからなのである。

多春用の肉は、通常冬の初め、日中の最高気温もプラスに轉じなくなった頃、家畜をまとめて屠殺することによって確保するのだが、カルピニもルブルクもモンゴルに滞在した時期の關係もあって、屠殺の様様に接することがなかったのではないかと思われる<sup>(45)</sup>。しかしこのような食生活の季節性が存在していた以上、當然初冬の集中的な家畜屠殺は行われていたであろう。『黑韃事略』に、

牧而庖者、以<sup>レ</sup>羊爲<sup>レ</sup>常、牛次<sup>レ</sup>之、非<sup>ニ</sup>大宴會、不<sup>レ</sup>刑<sup>レ</sup>馬。

とあるが、馬との對比で羊牛の屠殺が行われていたことを知ることができる。ちなみに、この史料に羊を食べることを第一とし、牛肉がそれにつぐとあるのは、近年のモンゴル人の嗜好、それに冬の肉の利用の順位と一致している。この『黑韃事略』の記事にたいする徐霆の疏に、

住草地二一、月餘、不<sub>レ</sub>曾見<sub>二</sub>韃人殺<sub>レ</sub>牛以食<sub>一</sub>。

とあるが、王國維の考證によると徐靈のモンゴル滞在は盛夏の頃である。<sup>(4)</sup> 夏期には羊でさえハレの場合でなければ屠殺しない。まして牛はモンゴル人の嗜好から言えば羊肉に劣るし、またこれを夏にわざわざ一頭殺して食い盡すのは容易でない。<sup>(4)</sup> 従つて夏には牛は餘り殺されず、徐靈もその屠殺を見る機會に恵まれなかったと解釋すべきであらう。初冬には牛は羊とともに屠殺されていたのである。

以上述べたようなモンゴル帝國時代初期にみられた食習慣というのは、それ以前から當然存在していたと想像されるが、傳統的な食習慣がすでに問題の時期に確立していたということは、すなわちモンゴル族と遊牧との關わりの深さを示すものであり、當時羊牛馬その他の家畜の飼育が少くとも通常の遊牧民のレベルに達していたことを物語るものだといえよう。

以上を要するに、十二世紀後半—十三世紀のステップのモンゴル族は、少くとも通常の遊牧民程度には羊、山羊、牛、馬そしてラクダを所有していたのであつて、そうした牧畜生産物に従つて近年と同じような食習慣も確立していた。従つて當時の家畜数は決して言われているほど少くなかつたと思われる。モンゴルの家畜は、馬の急増やラクダの増加などの點に特徴的に示されているように、帝國建設後に著るしく發展を示した部分が當然あつたのであるが、基本的な部分は、それに先立つ時期において既に一定のレベルに到達していたと思うのである。

## むすび

以上述べたように、十一世紀—十三世紀（私は、史料が割合豊かになる十二世紀後半—十三世紀を中心述べてきたが）におけるステップのモンゴル族の狩獵は、ステップの狩獵としてのありかたをもち、附近に森林があれば、その動物をも狩るが、大きくみれば主にステップの野獸を狩るというものであつた。ステップには森林に劣らず動物が多かつたので、このよう

なステップの狩獵は、必然的に經濟的に重要性をもった。ステップのモンゴル族がかつて森林タイガの狩獵民であり森林に居住して、森林の狩獵を行っていたとしても、この時代はステップに居住し、このようなステップの狩獵、ステップ型狩獵を行っており、その後もそうであったから、彼らの狩獵との關わりは引續き重要なままであった。彼らの狩獵は、森林の狩獵の殘滓として衰退していったのではなかった。

一方、彼らの遊牧については、森林民は羊を飼わないという考え方に基づくならば、その飼育家畜の點で十一世紀という早い時期にその羊はもとより、馬、牛、ラクダ等まで持っていた彼らは、その當時既に森林の生活から離れ、ステップの遊牧を行うようになっていたかもしれない。そしてこのことは狩獸もこの頃ステップ型のそれへと移行していたことを意味するかもしれない。そして十二世紀、ことに史料によつてこの問題をあれこれ分析できる十二世紀後半には、羊、山羊、牛、馬ともに、ウラジミルツォフが述べている以上に、少くとも「通常の」遊牧民と同じ程度には、飼育されるようになっていたように思われる。「通常の」遊牧民と當時のステップのモンゴル族の比較を行うさい「通常の」の基準をどこに置くかは困難な問題だが、羊、馬、牛、ラクダを交易に出したとか、くだつては貧民であるモンゴル人でも穀粉の入手のために羊を交易に出したとか、各家庭に牛と馬の乳房を型どつた偶像が置かれていた云々とかなどのことは、ステップのモンゴル族の十一—十三世紀當時の遊牧を「通常の」遊牧民並みのそれに至つていたと推測することを許すであろう。十一世紀とは言わず、十二世紀後半まで時期をずらすならば、どのようにみてもステップのモンゴル族は通常の遊牧並みの遊牧への移行を一應完成していただであらうと思う。ウラジミルツォフの言う遊牧狩獵民とは内容的に差異があつたとはいえ、當時のステップのモンゴル族は、まさに遊牧狩獵民だったのである。

遊牧民でありながらこのように狩獵を、それがステップ型の狩獵であれ、熱心かつ盛んに行つていたというのは、一見奇妙に思われるが、しかしモンゴル高原のステップに居住した遊牧民は基本的には、古來このようなタイプの生活を営んできたのである。彼らの經濟は、このように遊牧と狩獵が深く關わりあつた形をもつてきたのである。遊牧も狩獵(ステ

ップ型の狩獵)も、野生動物を對象とするか、家畜を對象とするかの相違はあるものの、同じ動物を對象とし、基本的に共通する肉、毛皮、角、筋などを利用するが故に、多分兩經濟の違いというものは、それほど大きいものとは遊牧民に意識されず、兩者は長い間分ち難く結びつき相互補完的な體裁を保っていたのであろう。

ステップのモンゴル族の遊牧狩獵民的經濟の遊牧と狩獵の關係はそのようなものであり、上述のようにステップ型であるという點で狩獵の質において、また家畜の多さからみて遊牧のレベルにおいて、モンゴル高原の通常の遊牧民のレベルに達していたのに違いない。

ステップのモンゴル族の經濟はかくして後進的とは言えず、少くとも十二世紀後半の段階においては、彼らの周邊に居住していたタタル族、ケレイト族、ナイマン族などの遊牧諸族と同じ型のものであり、同じレベルのものであったであろう。それ故にこそ、この經濟力を一因として、テムジンはいこれらの強力な諸族によく對抗し、ついにそれらを打ち破り、モンゴル高原を統一することもできたのだらうと私は考えている。

## 註

- (1) Б. Я. Владимирцов, *Общественный строй монголов, монгольский кочевой феодализм*, Ленинград, 1934 (その和譯『蒙古社會制度史』外務省調査部、昭和十一年四月) 頁 33—46。(和譯、八九—一九頁)。
- (2) 原山煌「モンゴル狩獵考」『東洋史研究』三二—、昭和四七年六月) 參照。
- (3) Б. Я. Владимирцов, 頁 33.
- (4) Б. Я. Владимирцов, 頁 35.
- (5) Б. Я. Владимирцов, 頁 36.
- (6) Б. Я. Владимирцов, 頁 39—40.
- (7) Б. Я. Владимирцов, 頁 41.
- (8) Б. Я. Владимирцов, 頁 110.
- (9) Б. Я. Владимирцов, 頁 129.
- (10) Б. Я. Владимирцов, 頁 129, 附 4.
- (11) 原山氏、一六—一八頁。
- (12) Г. Е. Марков, *Кочевники Азии, структура хозяйства и общественной организации*, Москва, 1976, 頁 53. 「多くの資料の傳えるところによれば、牧畜經濟の生産物では、モンゴル人の生計には不足で、彼らの經濟において狩獵が重要な意義を有していた。」

- ④ 後藤富男氏『内陸アジア游牧民社會の研究』吉川弘文館昭和四年、六一頁。
- ⑤ Н. Ишжамц, *Монголд нэгдсэн төр байгуулагдасч феодализм бүрэлдэн тогтсон нь*, Улаанбаатар, 1974, р. 68.
- ⑥ 原山氏 一九頁。
- ⑦ 原山氏 一九頁。
- ⑧ ᠤᠯᠠᠩᠪᠠᠭᠠᠲᠤ ᠪᠤᠭᠦᠳᠡ ᠨᠠᠢᠷᠠᠮᠳᠠᠬᠤ ᠮᠣᠩᠭᠣᠯ ᠠᠷᠠᠳᠤ ᠤᠯᠤᠰᠢᠨ ᠲᠤᠭᠤᠯᠤᠰᠤ, 1966, pp. 381—382. ᠤᠯᠠᠩᠪᠠᠭᠠᠲᠤ, 1966, pp. 381—382. ᠤᠯᠠᠩᠪᠠᠭᠠᠲᠤ, 1966, pp. 381—382.
- ⑨ Ж. Самбуу, *Малчин ардын амьдрал ахуй, хэв заншлаас*, Улаанбаатар, 1971, pp. 85—86.
- ⑩ А. Дулмаа нар (Редактор), *БНМАУ-ын агнуурын амьтад ба ан хамгаалаа*, Улаанбаатар, 1972, pp. 20—21.
- ⑪ О. Намнандорж, *Бүгд найрамдах монгол ард улсын дархан газар, ан амьтад*, Улаанбаатар, 1964, p. 55.
- ⑫ О. Намнандорж, *БНМАУ-ын дархан газар цаазтай амьтан*, Улаанбаатар, 1976, p. 78.
- ⑬ О. Намнандорж, Б. Н. М. А. *Улсын дархан газар, цаазтай ховор амьтад*, Улаанбаатар, 1957, p. 19.
- ⑭ О. Намнандорж, 1957, p. 18. О. Намнандорж, 1964, pp. 51—52. О. Намнандорж, 1976, p. 81. А. Дулмаа нар, 1972, pp. 199—200.
- ⑮ О. Шагдарсрэн, *Бүгд найрамдах монгол ард улсын ховор ан амьтан*, Улаанбаатар, 1962, p. 11.
- ⑯ Т. Хайдав, Б. Чагнаадорж, *БНМАУ-ын ан амьтад*, Улаанбаатар, 1969, p. 52.
- ⑰ О. Намнандорж, 1964, pp. 114—116. О. Намнандорж, 1976, pp. 94—98. Т. Хайдав, Б. Чагнаадорж, 1969, pp. 40—42. А. Дулмаа нар, 1972, pp. 209—210.
- ⑱ О. Намнандорж, 1964, pp. 116—117. О. Намнандорж, 1976, pp. 94—95. Т. Хайдав, Б. Чагнаадорж, 1969, pp. 37—39.
- ⑲ О. Намнандорж, 1964, pp. 114—116. О. Намнандорж, 1976, pp. 94—98. Т. Хайдав, Б. Чагнаадорж, 1969, pp. 40—42. А. Дулмаа нар, 1972, pp. 209—210.
- ⑳ О. Намнандорж, 1964, pp. 76—78. О. Намнандорж, 1976, pp. 100—101. Т. Хайдав, Б. Чагнаадорж, 1969, pp. 44—45.
- ㉑ О. Намнандорж, 1964, p. 79. О. Намнандорж, 1976, pp. 96—98. Т. Хайдав, Б. Чагнаадорж, p. 46. А. Дулмаа нар, 1972, pp. 212—213.
- ㉒ О. Намнандорж, 1964, pp. 113—114. Т. Хайдав, Б. Чагнаадорж, 1969, pp. 29—31. А. Дулмаа нар, 1972, pp. 204—205.
- ㉓ О. Намнандорж, 1976, pp. 103—104. Т. Хайдав, Б. Чагнаадорж, 1969, pp. 31—33.
- ㉔ О. Намнандорж, 1964, стр. 68—69. О. Намнандорж,



- 1976, p. 106. Т. Хайдав, Б. Чагнадорж, 1969, pp. 33—36. А. Дулма нар, 1972, pp. 206—207.
- 62 Х. Гунгажав, *Tarvaga бол манай орны үндэсний баялагийн нэг нэн*, Уланбаатар, 1959. その他上述の動物に関する文献のいくつか。なお拙稿「タルバガンとモンチル」(『知識』二二(一九八一年)参照)。
- 63 О. Намнандорж, 1964, pp. 126—128. Т. Хайдав, Б. Чагнадорж, 1969, pp. 78—79. А. Дулма нар, 1972, pp. 147—148.
- 64 陰山方面のステップに関するこの史料は、この點で若干參考になるかもしれない。「赫連十居、未能養虎、蝙蝠世食」邊書「宜先討大檀」、及則收其畜產、足以富國、不及則校獵陰山、多殺禽獸、皮肉筋角、以充軍實、亦愈於破一小國」(『北史』卷二十二「長孫嵩傳」)。
- 65 拙稿「北方遊牧社會の基礎的研究——モンゴルのステップと家畜——」(早稻田大學文學部東洋史研究室「中國前近代史研究」雄山閣、昭和五年所收)、『二三八頁。なおモンゴル高原南部にも森林ステップが存在したが、それらの多くはタイガからステップへの移行地帯に存在しているとは言えない。この地方の森林ステップの問題の若干のことについては、拙稿「モンガイと陰山」(『史觀』一〇二(昭和五年)参照)。
- 66 伊藤幸一『モンゴル經濟史序説』風媒社、一九七五年、四七頁。
- 67 Е. Дузаншарав, *Залуу анчдад өгөх зөвлөгөө*, Уланбаатар, 1960.
- Ж. Дамдин, *Буурал анчны тэмдэглэл*, Уланбаатар, 1963. Ж. Самбуу, 1971, pp. 87—99.
- 68 カルビニ・ルンルト、護雅夫譯『中央アジア・蒙古旅行記』桃源社、昭和四十年、一四七頁(以下「カルビニ・ルンルト」 whenever the translation is used)。
- 69 W. W. Rockhill, *The Journey of William of Rubruck to the Eastern Parts of the World, 1253—55 as narrated by himself, with two accounts of the Earlier Journey of John of Plan de Carpine*. Reproduced, by permission of the Hakluyt Society from the edition originally published by the Society in 1900 Kraus Reprinted Limited, Nendeln/Liechtenstein, 1967, p. 69.
- 70 W. W. Rockhill, p. 69, note 2.
- 71 ホターニン、東亞研究所譯『西北蒙古志』(第二卷「氏俗・慣習編」龍文書局、昭和二十年、二八九頁)。
- 72 W. W. Rockhill, p. 69, note 3.
- 73 『譯語』「土產」の項。
- 74 『世界大百科事典』(一九七二年版、平凡社)「とびねずみ」の項。
- 75 Х. Гунгажав, 1959, p. 5. Ж. Дамдин, 1963, p. 77. Т. Хайдав, Б. Чагнадорж, 1969, p. 83.
- 76 カルビニ・ルンルト、二二頁。
- 77 *monggol-un m'usa tobcatan* (『モンゴルの秘密の歴史』) (以下 NT 参照)、『\$123.
- 78 NT, \$179.

- (47) Я. Цэвэл, *Монгол хэлний товч тайлбар толь*, Улаанбаатар, 1966, стр. 423. 小澤重男「元朝秘史蒙古語の「幹羅阿戈劣額孫」について」(『現代言語學』三省堂、昭和四十七年所収) 参照。

- (48) Я. Цэвэл, 1966, p. 769. 『蒙古学蒙古語文庫歴史研究所整理』「十一」巻本辭典』『蒙古学』一九七七年、三二四頁。

- (49) NT, \$161, \$177, \$197, \$250.

- (50) NT, \$252.

- (51) NT, \$67.

- (52) NT, \$128.

- (53) Цэвэл, p. 639, 『「十一」巻本辭典』三二五頁。

- 『蒙古大學蒙古語文庫研究室編』『蒙漢辭典』、呼和浩特、一九七六年、五七三頁。

- (54) Рашид-ад-дин, *Сборник летописей*, том I, кн. II, пер. О. И. Смирновой, прим. Б. И. Панкратова и О. И. Смирновой, ред. А. А. Семенов, М.—Л. 1952, стр. 130.

- (55) NT, \$89, \$90.

- (56) 拙稿、昭和五五年、二三六—二四二頁、帝國建國前と後ではモンゴル族の居住していたステップが、山岳、森林に近いステップからオープン・ステップに変わったとする岩村忍氏の考え方に、私は賛成できない。岩村忍氏『モンゴル社會經濟史の研究』、京都大學人文科學研究所、昭和四三年、第一部第五章「遊牧の形態」参照。

- (57) NT, \$9, \$12, \$239, ラシードが森のウリヤンカト族が飼育

したと記している「山の牛」をウラジーミルツォフはシベリア鹿と考えているが(Б. Я. Владимирцов, стр. 34)、『荷物』積んだところからトナカイ(наа буга)ではないだろうか。モンゴルのエス・バダムハタンもそう考えている С. С. Бадам-хатан, *Хөгсөлийн цагтан ардын аж байдын тойм*, STUDIA ETHNOGRAPHICA, II-1, Улаанбаатар, 1962, p. 16. 田中克彦譯「フンスグル地方トナカイ遊牧民の生活形態のあらまし(その一)」(『北アジア民族學論集』、第四集、北アジア民族學研究會、一九六七年所収)、三八頁。ラシードの森林民の狩獵生活についての記述は、Рашид-ад-дин, *Сборник летописей*, том I—кн. I, пер. Л. А. Хетагурова, ред. и прим. А. А. Семенова, М.—Л., 1952, стр. 123—124. 参照。

- (58) ヴェルコ・ボロ、愛宕松男譯注『東方見聞錄』I、平凡社、昭和四五年、一四八頁。

- (59) 蕭大亨「北虜風俗」の「耕獵」の項。江上波夫氏はこの史料に基づいて「明代の蒙古人も饑虚を充す爲にのみ射獵した」と記したが(『古代ユーラシア北方文化』、全國書房、昭和三年、一一五頁注1)、不當である。本史料を讀めばわかるように、ここでは春、夏の時期の狩獵については食糧の不足を補うための程度のものであると言っているからである。

- (60) 「教戰」の項。

- (61) 清代モンゴルの狩獵については、私はまだ十分に分析していない。モンゴルのシャール・ナツアクドルジの記しているところによれば、清代モンゴルにおいては、滿洲人の指揮下、軍事訓

練をかねた大規模な狩が行われ、一方、一般モンゴル人は銘銘で狩獵を行ったが、それは彼らが生きていくことをとりつくりうものとなっており、家畜の少い、あるいは無家畜の貧困モンゴル人の従事する経済の一分野となっていたという (III. Хангадорж, *Халхын түүх (1691—1911)*, Улаанбаатар, 1963, p. 118.)。

62 『史記』卷一〇「匈奴列傳」、江上氏は匈奴について「彼等が野生の鳥獸を捕へ食用に供したのは、彼等が窮乏に類した場合とか、軍事的活動に従事していた場合とか、要するに彼等が牛馬羊の大群より離れて自給自足の必要に迫られた場合が多かったようである」と述べ、資料をあげているが(前掲書、八二頁参照)、それは全く不適當な資料だと思ふ。

63 『後漢書』卷九〇「烏桓鮮卑列傳」

64 『周書』卷五〇「異域傳」

65 『史記』卷一〇「匈奴列傳」

66 『三國志』魏書、卷三〇「烏丸鮮卑東夷傳」裴松之注所引の王沈の『魏書』

67 『遼史』卷六八、「遊幸表」

68 『遼史』卷三三「營衛志」。なお遼代の契丹族の少くともその王侯貴族は鹿狩を最も盛んに行った(島田正郎「遼代社會史研究」三和書房、昭和二十七年、第四章第二項参照)。

69 Б. Я. Владимирцов, стр. 36.

70 Б. Я. Владимирцов, стр. 36—39.

71 Б. Я. Владимирцов, стр. 39.

72 Б. Я. Владимирцов, стр. 39.

73 『契丹國志』卷二「四至鄰國地里遠近」。この部分は趙志忠『陰山雜錄』に基づくと思われる。趙志忠は一〇四一年より前に遼朝にいた頃に、この書を著わしたと考えられるという (Tamura Jitsuzo, 'The Legend of the Origin of the Mongols and Problem concerning Their Migration, *Acta Asiatica*, No. 24, Tokyo, 1973, p. 7.)。

74 多分山羊も飼養していたはずだが、山羊は羊と一括されてしまふことが、しばしばある。

75 『遼史』卷二九「天祚本紀」

76 王國維「蒙古考」(《觀堂集林》卷一五、史林七)

77 同書 卷上

78 Рашид-ад-дин, том I—кн. I стр. 18—19.

79 NT, §45—46.

80 『元史』卷一「太祖本紀」

81 ムスルンが自己の所有家畜を量ったやり方は、『史記』「貨殖列傳」や『北史』「爾朱榮傳」にみられる「谷量」と關係があるであろう。モンゴル族に關しても清代の『從軍雜記』に「稱三以谷量馬、謂三盈溝」とあり、「谷量」と同じような方法が存在した。

82 Рашид-ад-дин, том I—кн. II, стр. 21.

83 NT, §182. なお「家畜に水を飲ませ」云々については、小澤重男「元朝秘史蒙古語と現代モンゴル語」(江上波夫教授古稀記念事業會編「江上波夫教授古稀記念論集 民族・文化篇」、一九七七年所收)参照。

84 NT, §87.

- ㉔ NT, \$85—86.  
 ㉕ NT, \$169.  
 ㉖ カルビニールブルク、一四七頁。  
 ㉗ カルビニールブルク、一四八—一四九頁。  
 ㉘ カルビニールブルク、一〇頁。  
 ㉙ NT, \$151, \$152, \$177, \$195.  
 ㊀ Ц. Насанбагжир, *Монголын аж ахуй хөтөлөлтийн үлэмжлэл шинэтгэл* (XIX зууны эцэс, XX зууны эхэн), Улаанбаатар, 1978.  
 ㊁ Д. Гонор, *Халх товчоон II*, Улаанбаатар, 1978, p. 322.  
 ㊂ NT, \$195.  
 ㊃ NT, \$277.  
 ㊄ NT, \$151—152.  
 ㊅ カルビニールブルク、一四八頁。  
 ㊆ 拙稿、昭和五五年、二四五—二四六頁。  
 ㊇ NT, \$100—101.  
 ㊈ NT, \$214.  
 ㊉ NT, \$124.  
 ㊊ NT, \$234.  
 ㊋ この車の觀點から帝國建國以前のモンゴルに牛が多く飼われていたという主張は、既に岩村氏がなしている（前掲書、第一部第五章参照）。私は同氏の主張をより具體的に、私なりの方法でまとめてみる。  
 ㊌ NT, \$6.
- ㊍ NT, \$55.  
 ㊎ NT, \$85—86.  
 ㊏ NT, \$118.  
 ㊐ NT, \$124.  
 ㊑ NT, \$145.  
 ㊒ NT, \$149.  
 ㊓ NT, \$177.  
 ㊔ NT, \$199.  
 ㊕ NT, \$64.  
 ㊖ NT, \$244.  
 ㊗ Ж. Самбуу, 1971, p. 79.  
 ㊘ Ц. Насанбагжир, 1978, p. 44.  
 ㊙ カルビニールブルク、一〇頁。  
 ㊚ カルビニールブルク、一四〇頁。  
 ㊛ カルビニールブルク、一四一頁。  
 ㊜ カルビニールブルク、一一頁。  
 ㊝ 岩村氏が、帝國建國前、モンゴル人の居住地からみて、彼らの間に牛が多く飼育されたとみたのは當っていると思う。ただしそれが盛んに農耕に使われたとか賛成できない見解も多い。最も納得できぬのは、帝國建國後牛の飼育が減少したと述べていること、そしてその主な理由を、彼らモンゴル人がオーブン・ステップに移ったことに求めていることである（同氏、前掲書、第一部第五章）。  
 ㊞ 拙稿、昭和五五年、二四五—二四六頁。  
 ㊟ В. Я. Владимирцов, стр. 38.

- (62) この考えは後藤富男氏（前掲書、二七七頁）、岩村忍氏（前掲書、七〇頁）によって支持されている。
- (64) Б. Я. Владимирцов, стр. 38—39.
- (65) エンゴルは、デイ・セチェンが、イェスゲイが死んで困窮していたテムジンにボルテを與えたのだから、この贈物 (beige) は保證的なものだろうと述べている (Д. Гонор, 1978, стр. 135)。
- (66) 後代、大富豪の王侯などが大型家畜數十頭、その他のもの多數を結納として與えた例があるが、革命後の調査では「富裕者と云はれる者の結納としては、馬二頭、銀三四十兩に無數の哈達」が與えられた（マイスキー・南滿洲鐵道株式會社庶務部調査課編『外蒙共和國 上編』、大阪毎日新聞社、昭和二年、一五六頁）。
- (67) 馬群というのは本來去勢馬だけでなく、一頭の種馬、その下につく復數の去勢馬、復數の雌馬、その子によって形成されているものである。この點からも若干問題に思われる。
- (68) NT, §95.
- (69) NT, §99.
- (70) カルビニ・ルブルク、一〇頁、五九頁。趙珙『蒙縫備錄』、『馬政』の項。『黑縫事略』。マルコ・ポーロ（愛宕氏譯）、一、一五一頁など。
- (71) 拙稿『クリエン考』（『古代學』、一六一、昭和四四年）、六一—六三頁。
- (72) NT, §139. 拙稿、昭和四四年、六六頁。
- (73) NT, §118.
- (74) NT, §124.
- (75) NT, §128.
- (76) NT, §169.
- (77) NT, §170.
- (78) 原山氏、一八一—九頁。
- (79) Ж. Самбуу, 1971, стр. 32, стр. 36.
- (80) 纂修人不詳『烏里雅蘇臺志略』（新修方志叢刊所收）
- (81) 謝濟世『西北域記』
- (82) カルビニ・ルブルク、二二頁。
- (83) カルビニ・ルブルク、一四四頁、夏秋、馬乳酒以外の乳製品（牛、羊、山羊、ラクダの乳製品）も食べていたことは言うまでもない（カルビニ・ルブルク、二二頁）。
- (84) カルビニ・ルブルク、一四四頁。
- (85) カルビニは一二四六年七月二日カラコルム附近に着き、一月半頃歸途についた。ルブルクは一二五三年二月二七日にモンケの宿營に到着、翌年七月歸途についた。
- (86) 王國維『黑縫事略箋證』
- (87) ラルソン、高山洋吉譯『蒙古風俗誌』、改造社、昭和一四年、二〇六頁。
- (88) Рашид-ад-дин, том I—кн. I, стр. 123—124. Б. Я. Владимирцов, стр. 41.

## THE PRACTICE OF NOMADISM AND HUNTING BY MONGOLIAN TRIBES

YOSHIDA Jun'ichi

Concerning the practice of nomadism and hunting by Mongolian tribes during the period from the eleventh century through the thirteenth century, Б. Я. Владимирцов has speculated that the practice of hunting had survived among them as a trace from their earlier mode of life as forest-dwelling hunters. Hunting had had the important purpose of supplementing food deficiencies at a time when only a few domestic animals were raised, and before their practice of nomadism had fully developed. At that time, the Mongolian tribes had existed thus as what must be called a "nomadic hunting" people. But because the practice of hunting had persisted merely as a remnant of earlier tribal habits, its significance gradually lessened and, by the fourteenth and seventeenth centuries, the economic importance of the practice of nomadism increased in its stead.

My own thesis runs contrary to this. I have found that, originally, a species of antelope, wild horses, wild donkeys, *tarbaghan* and many other various kinds of animals had thrived on the Mongolian steppes. The Mongolian tribes had at that time chiefly protected these wild animals of the steppe. Consequently, the hunting practiced by the Mongolian tribes during the eleventh through thirteenth centuries must be recognized as a peculiar mode of steppe-life; and hence differing from the form of hunting practiced by forest-dwelling people, supposed to have persisted among them as a remnant of a former forest-dwelling mode of life. From the time of the Xiongnu 匈奴, thus, the many nomadic tribes of the Mongolian steppes hunted enthusiastically in the same numbers as their forbears had. Consequently, even later, hunting as practiced by the Mongolian tribes of the eleventh through thirteenth centuries did not easily die away. Even during the fourteenth through seventeenth centuries, hunting continued to be practiced on as large a scale as before.

On the other hand, concerning the practice of nomadism, it can be demonstrated that the Mongolian tribes from the eleventh through thirteenth

centuries had raised many sheep, goat, cows, horses, etc. And not, as Владимирцов has said, at a time prior to the development of their nomadism. It can be after all assumed that their traditional habits of eating had by that time been already clearly established.

From this perspective, it can be seen that the Mongolian tribes during the eleventh through thirteenth centuries had practiced on a large scale a style of hunting appropriate to the steppe, and had also developed a standard style of nomadic life. Economically, these two aspects were jointly essential. The relationship between the two was largely complementary and supplementary. A similar relation between hunting and nomadism also pertains to the economic situation of the later nomadic tribes of the same plateau. In other words, the standards and structure of the economy of the Mongolian tribes during the eleventh through thirteenth centuries were not especially different from the general economic situation of the later nomadic tribes of the same area. As an explanation of the Mongolian tribal economy that formed the basis of the Mongolian imperial state, this thesis has more validity than Владимирцов's.